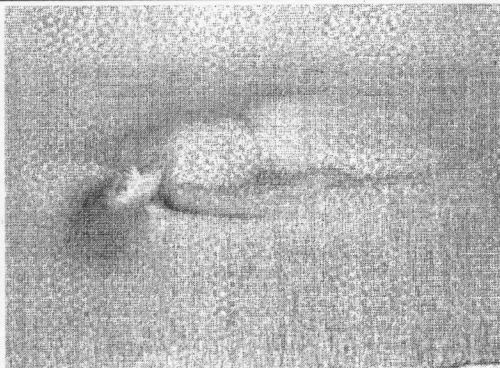


透明感増し清々しく 早川俊二展



風景へ・2006 Josette

パリ在住の画家、早川俊二が二十九日まで、東京・神田錦町のアスクエア神田ギャラリーで二年ぶりの新作展を開いている。人物画や静物画で合わせて二十八点。

自分で開発したプレスコとテンペラを融合したような堅牢な絵肌に、ペインティングナイフを駆使して濃密な写実の世界を創り上げている。透明で繊細な表現が可能な独特の絵肌だ。

最も大きい作品は横が二倍近い「風景へ・2006—Josette」。

横たわる女性を描いている。ナイフによる緻密なタッチの積み重ねが、肉の重みと同時に、息づく女体のしなやかさを鮮やかに描き出している。

見渡してみても、画面が前回展より透明感を増し清々しくなった。聞くとも長い間使ってきた絵肌作りの素材が突然製造中止になってしまったのだという。制作はそこで一旦、頓挫したが、別の素材を見つけて試みに使ったところ、かえって調子がよくなったのだそうだ。そのせいも、カップやコー

ヒーポット、貝などが、清新な空気の中で澄明な詩をうたっている。これ

が、早川流の「空気遠近法」なのだろうか。

レオナルド・ダ・ヴィンチが「モナ・リザ」を描くの用にいたという、「スフマート」なる技法がどんなものかずっと気になっていたが、今回の早川の仕事にいささか、そのヒントになりそうなものを感じた。

「スフマート」とは、物の輪郭線をなだらかにぼかして描く空気遠近法のこと。「優れた人物画は、レオナルドにしろフエルメールにしろ、輪郭線は線描でなく、ぼかして描かれている」と早川は言っている。

(編集委員 竹田博志)

透明感増し清々しく

「早川俊二展」

パリ在住の画家、早川俊二が二十九日まで、東京・神田錦町のアスクエア神田ギャラリーで二年ぶりの新作展を開いている。人物画や静物画で合わせて二十八点。

自分で開発したフレスコとテンペラを融合したような堅牢な絵肌に、ペインティングナイフを駆使して濃密な写実の世界を創り上げている。透明で繊細な表現が可能な独特の絵肌だ。

最も大きい作品は横が二メートル近い「風景へ・2006-Josette」。横たわる女性を描いている。ナイフによる緻密なタッチの積み重ねが、肉の重みと同時に、息づく女体のしなやかさを鮮やかに描き出している。

見渡してみて、画面が前回展より透明感を増し清々しくなった。聞くと、長い間使ってきた絵肌作りの素材が突然製造中止になってしまったのだという。制作はそこで一旦、頓挫したが、別の素材を見つけて試みに使ったところ、かえって調子がよくなったのだそうだ。そのせいか、カップやコーヒーポット、貝などが、清新な空気の中で澄明な詩をうたっている。これが、早川流の「空気遠近法」なのだろうか。

レオナルド・ダ・ヴィンチが「モナ・リザ」を描くのに用いたという、「スフマーチ」なる技法がどんなものかずっと気になっていたが、今回の早川の仕事にいささか、そのヒントになりそうなものを感じた。

「スフマーチ」とは物の輪郭線をなだらかにぼかして描く空気遠近法のこと。「優れた人物画は、レオナルドにしるフェルメールにしる、輪郭線は線描ではなく、ぼかして描かれている」と早川は言っている。

(編集委員 竹田博志)

日本経済新聞 2006年(平成18年)4月21日(金曜日)掲載